

横浜市小児科医会ニュース



No.46 2013年4月1日

≡≡≡ 時 言 ≡≡≡

“若手小児科医よ、海外へ”

横浜市小児科医会常任幹事 向山秀樹
(向山小児科医院)

市場は、日銀総裁の新しい金融緩和策の決定から、2%の物価上昇率は達成されると強調し、日銀の今の物価見直しの上方修正を検討する方向が表明されました。それから一週間で、市場の株価が急速に進むなど、大きく反応してきました。公共事業の大盤振る舞いに、財政はもつか、金融緩和の出口戦略は大丈夫か、そんな大人の眼にも耐えなければ成らない現政権のアベノミクスの様相であります。

一方、東南アジアの進行国に於いては、円安がもろに響くのではと、驚異を感じ始めています。

政権が再び自由民主党に戻り、長期政権と考え、思われているような情報ではありますが、子供達を見守る、私達、小児科医はどのような経済波の中を彷徨うのか、不安の一言であります。

しかし、いつも気になることが有ります。それは、日本は東南アジアの地にあり、ここから動くことはありません。そして、多くの私共、日本の小児科医会の会員は、特に、近隣の東南アジアの地人の小児科医を友人として持っていますか？という疑問です。

また、東南アジアの多くの主だった国々の首都に行って、同じ質問をしてきました。

“ドクター、あなたは日本の小児科医の友人がいますか？”

シンガポールのシンガポール、韓国のソウル市、タイのバンコク市とチェンマイ市、マレーシアのクアラルンプール市、中国の大連市、上海市、台湾の台北市、いずれに於いても、全く友人はいないという返事でした。

各地の大病院が日本の大学医学部と交流があるという所も数か所ありましたが、担当の教授が来て、交流のサインをし、写真を撮っただけのものが多く見受けられました。

話を聞いてみると、多くの現地の現役のドクターの方々は、種種の意味で大国、日本のドクター、殊に、小児科医と友人に成りたいというものでした。かつて、日本は、先進国の欧米にばか

り眼が行っていましたが、多くの留学先はそれら、英語圏の国々が対象でした。東南アジアのドクターは母国語に加えて、流暢な英語を話しますし、大変、意欲的に物事を進めていきます。各国との交流に於いては、言語ばかりでなく、文化や風習、慣例など相違のあるものの、日本の側に、交流のその気がないのではと言うドクターも、居られました。

先に触れた様に、経済の環境が大きく変わりつつ、また、参院選のような政治的不安要素は山積するものの、現場で子供達を診ている実地医家の小児科医同志が東南アジアの同業の方々と交流して、アジアの子供たちを地域として診てゆく動きに連動できれば良いかと願って居ります。

日本医師会、日本小児科学会、日本小児科医会等の各組織にも、国際交流の窓口が設定されているものの、一般会員同志の交流にまでは、至っておりません。

この4月に広島県広島市に於いて、第116回日本小児科学会学術集会の席上で、サウスカロライナ医科大学の小川眞紀雄教授の招待講演がありました。

“若手小児科医よ、海外へ!! 私の経験から”

何歳になっても小児科医は、海外へ眼を向けて欲しいという志と伺いました。

会員の先生方は、どのように考えられますか？



最近の話題

(2)

医療政策と小児医療

こどもクリニック若葉台

保坂 シゲリ

小児医療にとって、医政が重要な課題であることを知っていただくために、最近のいくつかの話題について書かせていただいた。

本年3月29日、ここ数年の小児科医をはじめとする関係者の努力が実り、予防接種法が改正され、かなりの部分が改善された。この間の関係者の努力は一定の評価を受けるものである。しかしながら、これだけの長期間、日本の予防接種政策が世界に比して数十年遅れたままであったことに、私達小児科医は強く責任を感じる必要がある。そして、医療の現場で気付きながら何もしないのは、私達小児科医が子どもたちの健康を守るとい自分たちの義務を放棄していることだと、認識する必要がある。

現代社会には、子どもの健康を阻む問題が山積している。医療は社会制度の中で行われるものであり、子どもの健康は社会の健康に強く左右される。子どもの貧困、子どものこころの発達、発達障害児を含めた育児、教育の問題など、小児医療は様々な社会的側面に左右されるし、小児科医は決して社会に無関心でいてはならない。

日本小児科医会は「小児保健法」の成立を求めているが、その概念がもともと「老人保健法」との対比で出てきたものであることなどから、もうひとつちがった、網羅的な視点

を要するように考えられる。現在日本には母子保健法、学校保健法、児童福祉法などの小児の健康に関連したいくつかの法律があるが、これらを包含した、子どもの権利と健康を守る理念法の成立が重要だからだ。このことから検討されているのが、仮称「成育基本法」である。今、日本の子ども達の未来を守る為の礎となる基本法が強く求められ、私達小児科医はその実現に向け、全力で取り組まなければならない。

他方、我々の足元に目を向けると、専門医制度の大幅な変更が、国（厚生労働省）の主導で企画されている。現在検討されている内容で変更が行われるとすれば小児医療にとって極めて影響は大きいものとなるが、小児科医の関心は高いとは言えない。

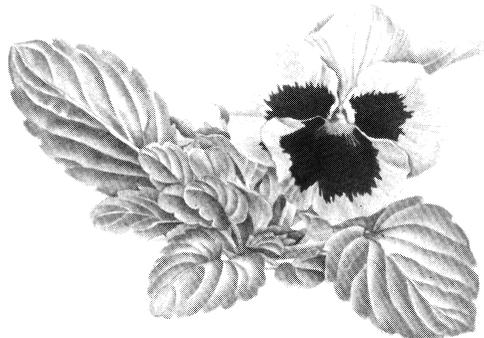
第一の問題点は、現在は各学会が各専門医の要件を定めそれぞれ認定しているものを、今後は各学会ではなく、新たに作られた機関が独自に要件を定めて認定することになる、ということだ。この専門医認定評価機構が、医師だけでなく法曹関係者や患者代表などを入れた第三者委員会で意見を聞きながら、すべての専門医の認定に関して一括して行うようにしようという動きがある。これは、誰が、どのような基準で認定の水準を担保するのか、各学会の独立性と専門性ならびに専門医のあり方について、根幹から揺るがすものである。

第二に、特に小児科の問題として、小児の総合医療を誰が行うかについて、大きな変更がなされようとしていることに注視が必要である。小児の初期診療、初期救急、予防接種、学校医、保育園医、乳幼児健診にいたるまで、かかりつけ医（家庭医）として新たに規定される総合診療医という専門医が行うことが想

定されているのだ。そもそも我々小児科医は、それぞれの専門を持ちながら、同時にみな小児の総合診療医である。小児救急においては、小児科学会もその考えに基づき枠組みを構築してきた。しかし、現在考えられている専門医制度は二階建てで、一階部分の基本専門科のひとつとして小児科専門医を、またその同列に新しくカテゴリーがつけられる総合診療医を据え、一階部分の専門医の認定は単独でしか選択できないという非常にいびつな構造になっている。そのため、小児科専門医は総合的に小児の医療を支える専門性と役割を持ちながら、小児の総合診療を担えないという、矛盾した立場に置かれる可能性がある。一方、

総合診療医の認定要件やその後の研修の中身について、小児科の研修が充分考慮されているとの情報はなく、総合診療医の必要要件を満たしているだけでは、小児の診療を充分行うことができるかについて、疑問が残る。

従来、小児科医にとって政治的活動はプライオリティが低いものだった。しかし、臨床医や研究医の地道な日々の業績だけではなく、医療をめぐる諸問題と向き合う上で、政治的な取り組みの重要性は増している。これからは小児科医も、医療をめぐる国の方向性に常に関心をはらい、強いメッセージを出し続けることが必要である。



横浜市小児科医会会長
藤原 芳 人

○東日本大震災に関する義援金は今年度も会計報告にありますように、総額、100万余円でした。これにより、被災3県の各小児科医会宛に33万円ずつ送金いたしました。初年度に匹敵する額が集まりました。皆様の篤いお気持ちに改めて感謝致します。2013年度も会費納入に併せて義援金のご案内をいたしますのでよろしくお願い致します。

○2012年10月17日の研修会は日本小児科学会の認定専門医の点数獲得の為に複数の講演を企画することになりました。

「ロタ感染症の現状と対策」に関して社会福祉法人北海道事業協会小樽病院小児科の辰巳正純先生にご講演をいただきました。ロタウィルスの多価の存在と局在的な流行の問題も認識されました。生ワクチンによる重複感染による抵抗性(症状の軽減)の増加の意義と腸重積の併発の懸念についても整理して述べていただきました。

もう1題は「なぜ、今HBワクチンの定期接種化なのか」；藤澤先生の講演（既に横浜市小児科医会ニュース前号の45号；2012年10月1日発行の時言に記述していただいております）はとてもインパクトがあったようで、以後の横浜のワクチンの出荷数がうなぎ上りのようです。ただ、日本のHB感染症の現状は由々しい状況のようです。これまで我国では遺伝子型C乃至Bが主であり、母児感染のみの着目していた体制では対応できない輸入型（遺伝子型A）の感染が蔓延しつつあるとのこと。さらに本ワクチンの普及ひいては定期接種化への働きかけをしなくてはならないでしょう。

○2013年2月1日の産科小児科研究会は多摩北部医療センターの小保内俊雄先生にSIDSの講演をいただきました。歴史的なまとめと病理学的なアプローチをお話いただきました。

○私、藤原芳人は来期も会長を継続させていただくことになりました。皆様よろしくご指導とご協力をお願い致します。

藤原からのお知らせ：

第4回日本小児禁煙研究会を横浜にて2014年3月9日（日）（上大岡のウイリング横浜）私が会長として開催致します。

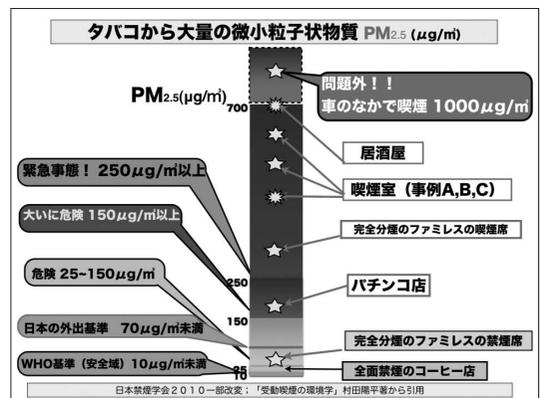
今回は女性（妊婦）への喫煙、受動喫煙の影響そしてタバコに対する社会の歪んだ認識の是正に力を注ぎます。松沢前神奈川知事にも招請講演をお願いしています。

本研究会は子どもたちを受動喫煙から守るために日本中の叡智を集めるべく2009年に井埜利博氏が立ち上げられました。第1回（東京）は井埜利博氏、第2回（静岡）は加治正行氏第3回（奈良）は高橋裕子氏により、開催されました。いずれ詳細をご紹介致しますので是非ご参加ください。

付録）今、話題のPM2.5の図版です。

私の医院で作直して、配布しているものです。

カラーで用意しています。ご入用の方はご連絡ください。



区会だより

青葉区小児科医会

平成24年度下半期の活動を報告します。

1. 青葉区小児科医会臨時総会
日時：10月26日（金）19時30分
会場：青葉区医師会館
7月18日に行われた青葉区選出の市議会議員との懇談会内容の報告をおこなった。
2. 第19回藤が丘小児科クラブ
日時：11月21日（水）19時30分
会場：昭和大学藤が丘病院講堂
主催：昭和大学藤が丘病院小児科
世話人：埜 弘道（青葉区小児科医会）
演題①川崎病に中等度僧帽弁逆流を合併した1例
演者 西岡 貴弘 先生
②心因性疾患が疑われた髄芽腫の1例
演者 外山 大輔 先生
③発熱，血球減少で発見された血球貧食症候群の1例
演者 松野 良介 先生
④川崎病再燃との鑑別が困難であった薬剤アレルギーの1例
演者 塚田 大樹 先生
3. 青葉区小児科医会学術講演会
日時：平成25年3月12日
会場：青葉区医師会館
演題：食物アレルギーのup to date
演者：昭和大学旗の台病院小児科学講師
今井 孝成 先生
4. 第20回藤が丘小児科クラブ
日時：平成25年3月13日（水）19時30分
会場：昭和大学藤が丘病院講堂
主催：昭和大学藤が丘病院小児科
世話人：埜 弘道（青葉区小児科医会）
演題①血漿交換を行った川崎病
演者 矢倉 一道 先生

②急性糸球体腎炎とアレルギー性紫斑病合併例

演者 布山 正貴 先生

③発熱，関節痛を主訴に来院した大腿骨骨髓炎

演者 小金沢征也 先生

④鉄剤不応性の貧血で発見されたサラセミアの2例

演者 新井 真衣 先生

5. 青葉区小児科医会総会

日時：3月26日（火）19時30分

会場：青葉区医師会館

会則の改訂，青葉区福祉保健センターでの講演会演者，25年度学術講演会等の検討を行った。

6. その他25年度上半期の青葉区福祉保健センターにおける乳幼児健診出動の割り当てを行った。

（文責 江並 朝猛）

都筑区小児科医会

都筑区小児科医会と昭和大学横浜市北部病院小児科との連携勉強会は今期3回開催されました。

第29回 平成24年10月12日

症例提示 「最近経験した急性散在性脳脊髄炎（acute disseminated encephalomyelitis）の2例

昭和大学横浜市北部病院

こどもセンター 仲田 昌吾 先生

特別講演 「小児神経疾患の免疫療法」

神奈川県立こども医療センター

神経内科 小坂 仁 先生

第30回 平成24年12月7日

症例呈示 「夜尿，昼間遺尿を主訴に来院した3歳女児の1例」

昭和大学横浜市北部病院

こどもセンター 児玉 雅彦 先生

特別講演 「小児夜尿症のマネージメント」

順天堂大学医学部附属練馬病院

小児科専任准教授 大友 義之 先生
第31回 平成25年2月8日

症例呈示1 「難治性尿路感染症に対し
腎瘻造設術を行った1例」

昭和大学横浜市北部病院

こどもセンター 磯崎桂太朗 先生
症例呈示2 「当院における尿路感染症
のまとめ」

昭和大学横浜市北部病院

こどもセンター 渡邊 佳孝 先生
特別講演 「小児の尿路感染症：VUR
と水腎症への対応」

神奈川県立こども医療センター

泌尿器科部長 山崎雄一郎 先生

新年度4月早々に役員改正を議題に総会を開催します。また、北部病院小児科との意見交換会もなるべく早い時期に開く方向で準備中です。来年度から新たな装いで参加することになると思いますので、ご期待いただくとともに、よろしくお願いたします。

(文責 殿内 力)

中区小児科医会

平成23年度下半期・24年度の活動について報告いたします。

第205回中区小児科医会学術講演会

日時：平成23年11月14日

会場：ローズホテル横浜

演題：「ロタウイルス胃腸炎とワクチンの必要性」

演者：横浜市立大学附属市民医療センター
小児総合医療センター長
森 雅亮 先生

第207回中区小児科医会学術講演会

日時：平成24年9月10日

会場：中区医療センター

演題：「病態から考えたインフルエンザ
感染症の治療戦略」

演者：九州保健福祉大学薬学部臨床生化

学講座教授 感染症治療学研究室
教授 佐藤 圭創 先生

第208回中区小児科医会学術講演会

日時：平成24年11月19日

会場：ローズホテル横浜

演題：「小児の気管支喘息とアレルギー
性鼻炎」

演者：横浜市立みなと赤十字病院小児科
磯崎 淳 先生
(文責：野崎 和之)

東部小児科医会

平成24年9月以降の主な活動を報告します。

* 横浜市東部西部合同小児科医会

(共催 横浜市西部小児科医会、横浜市東部小児科医会)

日時：平成24年9月13日

会場：ホテルキャメロットジャパン

演題1：市中病院小児科で経験した冠動脈
異常(画像診断)

演者：横浜市立市民病院 小児科部長
山下 行雄 先生

演題2：マイコプラズマ感染症一診断・耐
性菌・発症機序に関する最近の話題

演者：札幌徳洲会病院 小児科医長
成田 光生 先生

* 第81回横浜市東部小児科医会

日時：平成24年10月4日

会場：横浜労災病院

演題1：ワクチンの最近の話題

演者：化学及血清療法研究所
早田 展生 先生

演題2：小児の頭痛

演者：日本医科大学付属病院
小児科講師 桑原健太郎 先生

***第82回横浜市東部小児科医会**

日時：平成25年1月17日

会場：横浜労災病院

「横浜労災病院症例検討会」

- 1 抗菌薬が無効だった「急性胆嚢炎」の1例 山内 麻衣 先生
- 2 小児急性画像診断：3例のsnapshot diagnosisは？
井口 梅文 先生
長崎 梓 先生
池川 健 先生
- 3 新生児脳梗塞の1例
大松 泰生 先生
- 4 生後3カ月未満の発熱症例とlow-risk criteriaの有用性について
津久井理絵 先生

ここ2～3年で予防接種の種類がかなり増え、平成25年4月1日より子宮頸がん、HIB、肺炎球菌を定期接種化されました。まだまだ任意接種も多く諸外国並みとはいきませんが、一歩前進と言えるでしょう。同時に我々小児科開業医の診療時間の時間配分も変わっていく様な気がします。諸先生方如何でしょうか？

(文責 山下 誠夫)

南部小児科医会

平成24年度下半期の事業内容をご報告いたします。

●定例研修会

平成24年10月26日（金）

於 神奈川県立汐見台病院

共催：グラクソスミスクライン株式会社

症例報告：新生児乳児消化器アレルギーの2カ月男児 小林 尚明 先生

特別講演

「皮膚科から見た小児の感染症とアレルギー」

講師 浅井皮膚科クリニック院長

浅井 俊弥 先生

●第14回南部病院小児科地域連携集談会

平成24年11月14日（水）

於 済生会横浜市南部病院

共催：済生会横浜市南部病院小児科、Meiji Seikaファルマ株式会社

①タンデムマスで再検となった2例：

永嶋 早織 先生

②胃腸炎症状を契機に発見された腎血管性高血圧の1例： 林 裕介 先生

③新生児てんかんの1例：

宮沢 啓貴 先生

④当科における熱性けいれんの診療方針：
佐藤 睦美 先生

●定例拡大幹事会

平成24年11月15日（木）

於 関内 別邸 空海（当番幹事 住田）

(文責 森 哲夫)

西部小児科医会

平成24年9月13日（木）、ホテルキャメロットジャパンにおいて、恒例の東部・西部合同小児科医会を西部医会の担当で開催しました。

講演1 「市中病院小児科で経験した冠動脈異常（画像診断）」

講師：横浜市立市民病院 小児科部長

山下 行雄 先生

現在、市民病院小児科には、副院長の石原先生、部長の山下先生と2人も秀れた循環器の専門家が揃っており、いつも適確な診断を指導をいただいています。そこで今回はとくにご覧いただき心エコーを活用した症例について講演をお願いしました。

講演2 「マイコプラズマ感染症—診断・耐性菌・発症機構に関する最近の話題」

講師：札幌徳洲会病院 小児科医長

成田 光生 先生

マイコプラズマ感染の診断で一般的なのはPA法（粒子凝集反応）でIgM抗体を検

出するものですが、ペア血清で4倍以上の変動か、単一血清で640倍以上。私たちの外来で手軽にできるイムノカードもIgM抗体を検出するが、既応感染でも陽性になるので、陽性すなわち感染急性期ではないが、スクリーニングとして有効である。治療についてはクラリスロマイシン10mg/kg/日程度では感受性菌でも効果不十分のこともあり、薬用量上限の15mg/kg/日で少なくとも4日間投与し、それでも効果がない場合に耐性菌感染を疑うことが望ましい。

当日はほぼ満席で、講演は大好評でした。西部小児科医会会長は、尾崎亮先生に交代します。

(文責 大西 三郎)

金沢区小児科医会

第17回金沢区小児科医会学術講演会

平成24年11月7日(水)

横浜テクノタワーホテルファミール3F
「麗峰」

一般演題

2011/12シーズンにおけるインフルエンザ診療：2010/11シーズンとの比較

横浜南共済病院小児科 鈴木紗弓、岩澤堅太郎、藤原祐、小川真喜子、西澤崇、成相昭吉 各先生

特別講演

耐性菌感染症の現状と対策—PK-PD理論を応用した高用量投与を含めて—

富士重工業健康保険組合 太田記念病院
院長・小児科部長 佐藤 吉壮 先生
前回同様大変盛況でした。

第18回金沢区小児科医会学術講演会

平成25年3月6日(水)

横浜テクノタワーホテルファミール3F
「麗峰」

基調講演

子宮頸がん予防のこれから

横浜市立大学附属病院化学療法センター
センター長 宮城 悦子 先生
先生方の取り組み

片桐レディースクリニック 院長

片柄 信之 先生

ふじわら小児科 院長

藤原 芳人 先生

竹田こどもクリニック 院長

竹田 弘 先生

質疑応答・自由討論 そしてまとめ

今回は4月からHib・小児用肺炎球菌・子宮頸がんワクチンの定期接種化にあたり、小児科医になじみの少ない子宮頸がんワクチンの最新情報とその具体的な運用方法を確認し合うことを目的に企画された。しかし実際の接種は内科の先生が多いためか今回の参加者は以下の通り低調であった。

出席者24名

小児科22名、産婦人科2名

金沢区13名、磯子区2名、戸塚区1名、保土ヶ谷区1名、港南区5名、南区1名、横須賀市1名、開業区16名、勤務医8名、

(文責 浅井 義之)

—— 庶務報告 ——

1. 常任幹事会

H24. 12. 7 (金)

於 ベイシェラトン6階 出席者11名

2. 役員会

H25. 3. 26 (火)

於 ベイシェラトン28階 出席者17名

3. 研修会

H24. 10. 17 (水)

於 横浜ロイヤルパークホテル3階

出席者79名

講演①『ロタウィルス感染症の現状と対策』

講師 社会福祉法人北海道事業協会小樽病院
小児科医長

辰巳 正純 先生

講演②『なぜ今、B型肝炎ワクチンの定期接種化なのか?』

講師 済生会横浜市東部病院こどもセンター
肝・消化器部門顧問

藤澤 知雄 先生

4. 第33回産婦人科・小児科研究会

H25. 2. 1 (金)

於 ブリーズベイホテル4階

出席者63名 (小児科:44名)

特別講演 『乳幼児の突然死をめぐる最近の状況』

講師 公益財団法人東京都保健医療公社 多摩北部医療センター

小児科部長 小保内優雅 先生

5. 広報活動

H24. 10. 1 (月)

「小児科医科ニュース」 第45号発行

6. 表彰

* 横浜市長表彰 (母子保健事業功労)

大西 三郎 先生

* 横浜市医師会学術功労者表彰受賞

中野 康伸 先生

7. その他

* 第20回横浜臨床医学会学術集談会

H24. 12. 8 (土)

於 ホテルキャメロットジャパン

小児科医会演題: 夜尿症の治療について

小児科医会演者: 鈴木小児科医院

鈴木與志晴 先生

* 義援金送金

(岩手・宮城・福島3県小児科医会)

送金総額: 990,000円 (H24. 11. 20送金)

(庶務 大西 三郎)

==== 会計報告(中間) ====

横浜市小児科医会会計の中間報告を申し上げます。

中間報告 H25. 3. 31現在

現在高 1,673,674円

(内訳) 現金 0円

郵便貯金 434,314円

医師信用組合 1,239,360円

△未払分 (交通費) (270,000円)

(会計 池部 敏市)

会員動向 (平成24年9月～平成25年3月)

入会 2名

〒235-0045

磯子区洋光台6-19-43

バンニーこども診療所

TEL 045-830-0767

箕原 豊

〒244-0801

戸塚区品濃町556-8

(医)スマイルスマイルこどもクリニック東戸塚院

TEL 045-820-6601

武井 智昭

退会 5名

区名	氏名	備考
その他	菅原 秀典	
港南区	堀越 節子	H24. 7. 2 逝去
南区	島田 俊子	H24. 7. 5 逝去
鶴見区	原田 美智子	H24. 8. 31 逝去
港北区	東 澄雄	

会員数: 272名 (平成25年3月31日現在)

編集後記

平成25年4月1日より、ヒブ、肺炎球菌および子宮頸ガン予防ワクチンが定期接種化された。一部のマスコミでは、子宮頸ガン予防ワクチンの副反応について、根拠に乏しい過剰な報道がなされているのが気になる。何か新しいことを進めようとする、必ずそれに抵抗する反動的勢力が出てくるのが常とは言うものの、私たち医師にとっての説明責任がますます重くなってしまったようだ。

また、風疹の大流行に伴い、横浜市でも4月22日から対象を限定し、MRワクチン接種費用助成が始まった。それはそれで良いこととは思われるが、かつて中2の女子のみに風疹ワクチン接種を行っていた時代のワクチンの専門家は、今のこの状況を予見できなかったのかと、首をかしげたくもなる。

(広報担当 大川 尚美)



2013年4月1日発行

横浜市小児科医会ニュース No. 46

題字 五十嵐鐵馬

発行人 横浜市小児科医会

代表 藤原 芳人

編集：横浜市小児科医会広報部

事務局：〒231-0062

横浜市中区桜木町1-1

横浜市医師会：事業二課

Tel 201-7363